

お釈迦さまの涅槃

黒田大圓
(武志)

お釈迦さまがお亡くなりになつた二月十五日を、私たち佛教徒は「涅槃会」^{ねはんえ}という行事を設けてその日をなつかします。

今年も、その涅槃会が近づいてまいりました。お釈迦さまの晩年がどのようなものだつたのか、そして、最後にどんな説法をなされたのかを思い出して、みなさんと一緒に涅槃会の供養をしたいと思ひます。

お釈迦さまの晩年には、いくつかの悲しい出来事がありました。たとえお釈迦さまであろうと、そのおもいには一抹の淋しさがあられたであろうと思ひます。

お釈迦さまの晩年については、「大般涅槃經」にくわしく記されております。この「大般涅槃經」は、お釈迦さまが靈鷲山を下られて最後の遊行に出られるとこ

ました。

最も頼りとしていた愛弟子を相ついで見送らねばならなかつたお釈迦さまの悲しみは、想像に難くありません。しかし、仏陀となり法を説く者の生き方として、悲しみに自己^{じき}を忘れるようなおろかな事はもちろんありませんでした。

サーリップッタの死の報せに、侍者のアーナンダ（阿難陀）があわてふためき、取り乱してお釈迦さまにその事を告げますと、お釈迦さまはいつも通りの静かな態度でこう申されました。

「アーナンダよ、いつも私が言つて いるように、愛する者とはいつか別れなければならぬ。この世のことは一つとして変化しないものはない」

お釈迦さまの悲しみは、おそらく誰よりも深かつたろうと思います。悟りを得られない人間と違うところはといえば、ただ、取り乱さないというだけのことかもしれません。

「大きいなる枝はいま枯れて落ちた。しかし大樹はな

お堅固に生きつづけるであろう。」

このあとお釈迦さまは、アーナンダに向かつて、有名な「自帰依・法帰依」を説かれました。

「自己^{じき}を洲とし、自己^{じき}を依り拠として他人を依り拠とせず、法を依り拠として他を依り拠としてはならぬ。」

私たち仏教徒は、この一句をとても大切にします。人生において洲たりうるものは、「よく整えられし自己^{じき}」以外なく、自己^{じき}をよく整えるためには法によるほかはありません。

この教えは、お釈迦さまの究極の教えであろうと思います。

しかし、サーリップッタとモッガラーナのお二人が亡くなられてからは、お釈迦さまの言葉には悲しいひびきが流れはじめます。

布薩^{ふさ}という儀式に出席されたお釈迦さまはそこに集う比丘たちにこう申されました。

「比丘たちよ、サーリップッタとモッガラーナがいな

なつてから、わたしにはこの衆会は空虚になつてしまつたような気がする。いまはあの二人の想い出だけが私を支えてくれる。」（雑阿含經）

初期の經典にはこのように、神聖化された仏陀釈尊ではなく、人間としてのお釈迦さまを素直に書き記してあります。そして自らにも言い聞かせるように、さきにアーナンダに説いた「自帰依・法帰依」のおしえを説かれました。

すでに八十の齢に達しておられたお釈迦さまは、侍者のアーナンダにこう語りかけられました。

「アーナンダよ、わたしは老い衰えた。老齢すでに八十に及んだ、たとえば古い車は革紐のたすけによつてやつと動くことができるが、わたしのからだもまだ革紐のたすけによってやつと動いているようなものだ」
その老躰にムチ打つように、「アーナンダよ、アンバラッティカーへ行こう」と申されるのです。

こうしてお釈迦さまの最後の伝道の旅がはじまります。どこを最終目的にされていたのかは知るよしも



ありませんが、お亡くなりになつたクシナーラの数キロ近くに、故郷であるカピラバツツがあることを思うと、かつて捨てた生まれ故郷を、一度訪れたいと願われたのかかもしれません。しかし、それはついに実現されずにおわりました。

アンバラツティカーからナーランダへ、そしてパトナへと旅を続けられました。

パトナという町からガンジス河を渡つて、ヴァイサリという村へ行かれるのですが、ずっと見送つてきた人達とは、ガンジス河の畔で別れなければなりません。今も現地では、ゴータマの渡しと呼んでいる舟着場にむかつてお釈迦さまはアーナンダにかかるられるようになるとぼとぼと歩いて行かれます。送る人はみな一様に、もうこの師に会うことはできまいと悲しみに心ふさがれていたに違いないと思うのです。このお姿を心に焼きつけて、決して忘れまいと、涙をこらえながら目ばたきさえ惜しむ人たちの姿が想像できます。

渡場を渡るお釈迦さまは、往年のようなきらめく生

氣はかけらもなく、その老いさらばえた老軀にまとうものは、うす汚れた壞色(エジキ)の衣のみ…。全くの無一物、無位の師が、なぜこうも尊いのか。

二千五百年経た私たちが今もなお恋い慕い、尊敬してやまないお釈迦さまは、まぎれもなく私たちと同じ一人の人間であります。

渡場の情景は、老いた父を見るように悲しくなつかしく、胸をしめつけます。

ガンジスを渡つたヴァイサリの郊外で、お釈迦さまは病を得てしまわれましたが、雨期が終わる頃には、ようやく身体も回復しました。

ヴァイサリは、半世紀にわたる伝道の間に何度となく往き来したなつかしい町でありました。そのヴァイサリを去る時、お釈迦さまは、ゆっくりと象のようにふり返つて「アーナンダよ、わたしがヴァイサリを眺めるのもこれが最後であろう」と申されたと書かれてあります。

その後、パーヴァーという町でチュンダという鍛冶





屋から供養を受けたお釈迦さまは、その食事が原因で死の病にかかつてしまわれました。驚き自責しつつは参じたチュンダに、「お釈迦さまはこう語られました。

「チュンダよ、二つの布施があつて最もその功德が大きい。一つは如来が悟りを開いたその最初になされた布施である。いま一つは如来が涅槃に入るときになされた最後の布施である。汝の布施は最も尊い功德の布施である。」

この言葉ほど限りなく深い思いやりに満ちた言葉を私は知りません。チュンダは身を投げ出して号泣し、そのまま出家しました。

パーヴァーを発ち、涅槃の地クシナーラへ向かわれる途中も、お釈迦さまの病状は次第に悪化していきました。

きのこの食を召したまい

重き病を得たまいて

腹くだりつつ世尊はいう

いざクシナーラへわれは行かんと

経典には何の粉飾もなく、ありのままの素朴さで記されてあります。

この生々しい記述は思わず胸をつかれるような悲しみを込めて、なつかしく私たちに迫ってきます。

一行がクシナーラ城のみえる沙羅の林に着いた時、お釈迦さまはアーナンダに申されました。

「アーナンダよ、私は疲れた。横になりたい。あの沙羅の双樹の間に床を敷いておくれ。」

薄い座具の下は、木の根がデコボコとして決して心地よい死の床とはいえなかつたでしょう。お釈迦さまは敷かれた布の上に頭を北に向けて右脇を下に、足を重ねて横になられました。

涅槃にお入りになるお釈迦さまを、もうお騒がせしてはならないと断るアーナンダを制して、お釈迦さまは百二十歳の老哲人を最後の弟子として受け入れ法を説かれました。最も長い間お釈迦さまに仕えていたアーナンダはいまだ悟り得ず、悲しみに耐えきれず泣きながらお釈迦さまに取りすがりました。

「私はいまだ阿羅漢の悟りを得られません。いま師

が涅槃に入つてしまわれたなら、私に師はありません、

私はどうやつて悟りに入ることができるのですか。」

その時お釈迦さまは、さきの「自帰依・法帰依」を繰り返し説かれ、つづけて申されました。

「アーナンダよ、憂うることはない、汝は如來に仕えること二五年、その間欠くことなくよく給仕してくれた。その功德により、汝は間もなく偉大な悟りを開くであろう。アーナンダよ、憂うことはない。」限りなくやさしい師のことばであります。また、御子であるラーフラには、父として次のような言葉をかけておられます。

「ラーフラよ、憂い悲しみ心を乱してはならぬ。汝は子としてなすべきことをなし終え、我もまた父としてなすべきことを終わつた。ラーフラよ、一切諸法は無常である。この無常をはなれて解脱を得、常樂に住するのが我が教えである。」

集つた比丘たちに真理の法を残しゆくことを伝えて、

お釈迦さまは静かに涅槃に入られたのです。

お釈迦さまの晩年は、決して平和で穏やかな日々ではありませんでした。むしろ、悲しみと肉体的苦痛の連續だつたといえるかもしれません。それでも一日も休むことなく伝道を続けられたのは、ただ仏法のためでありました。

弟子たちへの、そして後世の私たちへの限りない愛情のためであります。

インドという風土の中で、八十歳という高齢の体を徒步で遊行するという苛酷な旅をし続けられたお釈迦さまの果てしないほどに深い慈悲の心に、私たちは包まれていることを忘れてはなりません。苦しみ悩む私たちをいつも見守つていてくださるお釈迦さまの、深い悲しみを湛えた瞳の色と——おこたらざにつとめよ——との最後のお言葉を思い起こしてくださり。

二月十五日は涅槃会です。みなさんひとりひとりが、お釈迦さまのお徳を慕つて生きていきたいものです。